被災文化財等救援活動における保存修理

ー東京国立博物館修理室での油彩画等保存修理活動ー

○土屋裕子、神庭信幸、鈴木晴彦、米倉乙世、平河智恵、小川絢子（東京国立博物館）
三浦知佳、池上久美（油彩画等保存）、北川美穂（工藝素材研究所）、宋亨蘭（東洋絵画修理技術者）

1. はじめに

東京国立博物館（以下、東博）は東北地方太平洋沖地震後文化庁からの要請を受け、被災文化財等救援委員会への全面協力を行なってきた[1]。本発表では被災した岩手県立高田高等学校（以下、高田高校）所蔵コレクションの油彩画および水墨画、陸前高田市立図書館所蔵の絵図の保存修理活動について報告する。

高田高校所蔵作品に救援委員会の支援の手が届いたのは、平成24年（2012）1月になってからであり[2]、その後燻蒸作業のため岩手県立博物館（以下、岩手県博）に輸送された。作品調査と保存処置の相談を受けた東博は、館内修理室で保存修理を行なうための手続きを開始し、同年1月20日東博の保存修復課職員が現地に赴き、救出された作品の状態調査、2点の大型作品の燻蒸準備の解体作業を行なった。同年2月20日、油彩画10点、水墨画1点、絵図9件が東博内の複数ある修理室に搬入され、同月22日修理作業を開始。処置後、平成24年8月20日岩手県立博物館に絵図を、高田高校に油彩画および水墨画を美専にて輸送・返却した。

修理作品リスト

通番	題名	筆者	員数	法量(mm)	材質	制作年	搬入時	修理内容
1	高田高校旧校舎	熊谷睦男	1面	237×170	厚紙・アクリル、水彩	2004年（平成16）4月22日	マットつきアルミフレーム付	消しゴム・濾過水によるクリーニング、フラットニング、マット新調、ラベル裏打ち、アクリル付額新調
2	浜の風景・夏	熊谷睦男	1面	410×318	カンバス・油彩	1988年（昭和63）7月23日	額なし	消しゴム・濾過水によるクリーニング、フラットニング、マット新調、ラベル裏打ち、アクリル付額新調
3	夏の残像	佐々木忠和	1面	498×605	カンバス・油彩	ー	額なし	解体、消しゴム・濾過水によるクリーニング、張り直し、保護ワニス塗布
4	磯近し	佐藤実	1面	318×410	カンバス・油彩	ー	額なし	剥落止め、濾過水によるクリーニング、カンバスの一部張り直し、絵具の欠損部への充填・補彩、保護ワニス塗布
5	静物	佐藤実	1面	499×725	カンバス・油彩	1994年（平成6）3月31日	額なし	解体、消しゴム・濾過水によるクリーニング、張り直し、補彩、保護ワニス塗布
6	氷上山	白石陸一	1面	453×527	カンバス・油彩	1967年（昭和42）	額なし	解体、消しゴム・濾過水によるクリーニング、張り直し、保護ワニス塗布、ラベルの裏打ち
7	いにしえの響き～記憶の空、海、大地	高澤俊郎	1面	1119×921	合板・アクリル	2010年（平成22）	作品一体型額付	解体、消しゴム・濾過水によるクリーニング、支持体修理・組立、剥落止め、絵具の欠損部への充填・補彩
8	三陸わが舗	畠山孝一	1面	1080×2610	カンバス・油彩	2005年（平成17）8月	額なし	「搬入前に木枠からカンバス外す?」、濾過水によるクリーニング、耳補強、木枠新調、ルースライニングによる貼り込み、保護ワニス塗布、額新調
9	三陸の舗	畠山孝一	1面	1305×1936	カンバス・油彩	ー	額なし	木枠から外す、磁器ータリーニング、ワニス塗布、耳強度、木枠新調、額金具新調、張り直し、絵具の欠損部への充填・補彩、額新調
10	名称不詳	丸木伊里（？）	1面	460×540	紙本墨画淡彩	ー	合板貼り付け	解体、濾過水によるクリーニング（脱塩）、仮張り
11	はまなすの咲く頃	吉田啓一	1面	725×605	カンバス・油彩	1988年（昭和63）7月24日	額なし	消しゴム・濾過水によるクリーニング、カンバスの一部張り直し、ワニスムラの調整
12	絵図	ー	9枚	ー	紙本墨画	ー	裏打紙なし	継ぎ合わせの確認、濾過水による加湿整形・変形修正、小麦粉デンプン糊による新規継ぎ合わせ

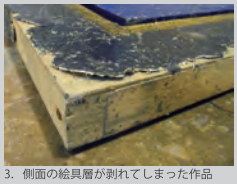
注：通番1～11は岩手県立高田高等学校所蔵コレクション、通番12は陸前高田市立図書館所蔵作品

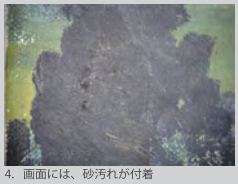
2. 被災作品の保存状態

高田高校芸術科佐藤一枝教諭によれば、作品は平成23年3月下旬、高田高校に勤務していた職員たちによって救出された後、作品を日当たりの良い軒下に出し、時々刷毛で砂を除去されたという[3]。海水がかかった状態で放置すれば、やがてカビが発生し、作品を汚損する結果となるはずであるが[4]、一般的には文化財にとってタブーとされる「天日に干す」という作業が、優れたファーストエイドとなり、水害に遭ったとは思えないほど、作品上のカビの発生は最小限に抑えられていた。カンバスに広がってしまったカビは、現在の技術では除去することは困難であり、そのカビを回避できたことは、作品にとって幸運であったと言えよう。

1. 大型の作品は解体し、ロール状にして燻蒸後、輸送

2. 海水で支持体が伸縮し、絵具層が剥離


3. 側面の絵具層が剥れてしまった作品


4. 画面には、砂汚れが付着

5. 構造内部にたまった泥汚れ

6. 構造に歪みがみられる作品

7. 額縁の内側にも砂汚れが残っている

8. ベニヤ板に張り込まれていた水墨画。シミがみられる

9. カンバスの釘は錆が著しい

10. 作品裏面の紙ラベル。適切なファーストエイドで失われずに残った

3. 処置内容と経過観察の必要性

それぞれについて、燻蒸、写真記録、状態調査の後、以下の作業を行なった。なお、絵図については、搬入前に安定化処置が終了していた。作業後に再度写真記録を行ない、修理報告書を作成した。

11. 注射器による剥落止めのための膠水溶液の注入

12. 粉状の消しゴムで表面の汚れを除去

13. 作品の凸凹に入り込んだドロ汚れをクリーニング

14. 濾過水によるクリーニング作業（脱塩）

15. 絵具層の剥落止めの後、構造の歪みを修正

16. 絵具の欠失部にほぐした繊維を充填

17. 分解した作品を再び接合

18. 小麦粉デンプン糊による新規継ぎ合わせ作業

19. 大型カンバスは麻布で耳の補強を行なう

20. ラベルは裏打ちの後、ポリエステルフィルムで包む

油彩画については、紙作品と異なり水によるクリーニングを行なうことができないため、残留した塩分が長期的にどのような変化をもたらすのか懸念される。塩分を含んだ画布が環境の整った場所や外気に触れる場所等、それぞれの環境に対してどのように反応していくのか、サンプルを作製し調査していくことが必要であろう。

なお、処置にかかる材料費を含む経費は東京国立博物館が負担し、輸送にかかる経費は救援委員会が負担した。

4. 今後の展望

レスキュー後の文化財の本格修理は始まったばかりであり、特に現在岩手県立美術館に仮保管の陸前高田市博物館所蔵の書跡、イラスト画、版画、油彩画に関しては、平成25年１月より陸前高田市教育委員会からの業務委託を受け、すでに本格修理ための調査が終了し、報告書を提出している。今年度再び同委員会と業務委託の契約を締結し、今年度半ば以降に具体的な作業に着手する予定である。今後はそれらの本格修理が具体化していくものと思われる。

[redacted]

1) 陸前高田等での東博の活動については、神庭、和田、鈴木が文化財保存修復課修復学会第33回大会にて「東北地方太平洋沖地震文化財等救援事業における東京国立博物館の活動報告（1）～（3）」（要旨集112-116頁）というタイトルのもと、津波被災現場からの救出、被災紙資料の脱塩処置について紹介している。
2) 岩手県立高田高等学校芸術科の佐藤一枝教諭は、同校図書館報『浜茄子』（第52号、高田高等学校図書館、2013年3月、12-37頁）においてレスキューの経緯について詳細に述べている。同図書館報に東博が作成した修理報告書の一部が掲載された。
3) 註2前掲図書館報によると、長年高田高校に勤務した岡澤孝之氏が救出のイニシアティヴを取り、これらの文化財を救出したという。
4) 岩手県立美術館に仮保管されている陸前高田市博物館所蔵作品はレスキュー当時、エアーキャップに包まれ、水分を含んだままの状態が長かったため、カビによる汚損が著しい。